

論文審査の結果の要旨

学位記番号	※第 甲 53 号	氏 名	佐 藤 由 佳
論文題目	『源氏物語』現代語訳の研究		
学位審査委員	主査 久 保 朝 孝 教授 (文化創造研究科) 副査 増 井 典 夫 教授 (文化創造研究科) 副査 酒 井 晶 代 教授 (文化創造研究科)		
論文内容の要旨			
<p>本論文は、近代以降現在に至るまで陸続と刊行されてきた『源氏物語』現代語訳について、まずその現状把握のために徹底した書誌調査を行い、次にそれら訳文の比較によりそれぞれの特徴を明らかにし、さらにそれら現代語訳の嚆矢である与謝野晶子『新譯源氏物語』の生成過程について考察し、最後にこれらの検討を踏まえたうえで、新しい現代語訳への提言として申請者自身による現代語訳の試みを加えたものである。</p> <p>本論文は四部一四章からなる。(41 字×42 行×376 頁／400 字詰め原稿用紙約 1,500 枚相当)</p> <p>第一部では、明治四五年以降令和二年に至る『源氏物語』現代語訳の書誌を集成した。(4～172 頁)</p> <p>その際、各種の現代語訳を、〈完訳〉、〈全訳〉、〈抄訳〉、〈意識〉、〈翻案〉、〈その他〉の各編に分類し、各編は、刊行年月日に沿って訳者ごとにまとめ、また、訳者ごとに《単行本》、《叢書》、《文庫本》の順に分類した。掲出書誌は、書籍名、巻数、出版者 (出版社)、刊行年月日、書籍サイズ、一頁行数、一行字数および (可能な範囲での) 書影、そして装丁や出版経緯などの事実説明とした。</p> <p>〈完訳〉編は、原文に概ね忠実であり、同一人により五十四帖すべての帖を口語体で訳しているものを対象とし、明治四五年二月に刊行が開始された与謝野晶子『新譯源氏物語』にはじまり、令和二年二月に刊行を終えた角田光代『源氏物語』までを取り上げた。〈完訳〉編に掲げた訳者は二人であるが、一人の訳者が複数回現代語訳の業をなしているもの、一つの現代語訳に対し複数の刊行をみるものもある。〈完訳〉編で取り上げたそれぞれの訳者ごとの刊行回数は、与謝野晶子は四三回 (『新譯』一九回、『新新譯』二四回)、吉澤義則は三回、谷崎潤一郎は一八回 (〈旧訳〉二回、〈新訳〉五回、〈新々訳〉一回)、窪田空穂は二回、佐成謙太郎は一回、玉上琢彌は一回、円地文子は三回、今泉忠義は三回、おのりきぞうは一回、秋山虔は一回、中田武司は一回、中井和子は二回、瀬戸内寂聴は三回、尾崎左江永子は一回、大塚ひかりは一回、上野榮子は一回、林望は二回、荻原規子は一回、小林千草・千草子は一回、中野幸一は一回、角田光代は一回。〈完訳〉編で取り上げた刊行書籍は、合計で九一種</p>			

におよぶ。

〈全訳〉編は、同じく原文に概ね忠実であり全訳を試みているが途中で断念したもの、完訳ではあるが単一訳者により完遂できなかったもの、もしくは当初より分担訳業が企図されたものとした。窪田空穂と与謝野晶子が分担訳業をなした《現代語譯國文學全集》『源氏物語』をはじめとし、完訳を目指しながら志半ばで他界した五十嵐力『昭和完譯 源氏物語』などを取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、一〇種である。

〈抄訳〉編は、五十四帖中の限定された帖および要所について原文に概ね忠実に訳されたものとし、舟橋聖一による《世界名作全集》『源氏物語』や、現代語訳のみならず原文を同時に収載する形式をとる瀬戸内寂聴や岩佐美代子らの書籍を取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、一〇種である。

〈意識〉編は、原文の一語一句にとらわれることなく、物語のあらすじをたどり、かつ作品の独自性を知りうるように訳されたものとし、大正、昭和、平成にわたって刊行された吉井勇によるものをはじめ、若年者向けの〈意識〉を刊行した木俣修、高木卓、福田清人などを取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、五六種である。

〈翻案〉編は、二次的創作ながら、原作のおもかげを十分にとどめている文学作品を対象とし、特定の登場人物の視点から描くなど『源氏物語』に関する多くの作品を残した田辺聖子をはじめ、橋本治『窯変 源氏物語』もここに分類し取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、三四種である。

最後に、以上の五分類には該当しないが、『源氏物語』現代語訳を考える上で見過ごすことのできない作品を〈その他〉編とし、アーサー・ウェイリーの英語翻訳版を日本語に訳した佐復秀樹、毬矢まりえ・森山恵などを取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、三種である。

なお、この六編に掲げるには至らなかったが調査段階で閲覧した刊行物について「閲覧文献一覧」として列挙するとともに、『源氏物語』現代語訳書誌集成の作業にあたり今後の課題として残った事項について「残された課題」と題し付記している。

第二部では、『源氏物語』現代語訳の比較検討一〈完訳〉を対象として一」と題し、第一部〈完訳〉編で取り上げた二人の現代語訳の内容について比較検討した。(173～305 頁)

第一章では、比較検討の方法を示し、第二章では、それぞれの訳者ごとに「訳者の略歴」、「書誌」、「桐壺」巻頭部の訳文」を掲げ、訳文の検討をするにあたっては、まずそれぞれの現代語訳に用いられている「依拠本文」について調査のうえ確定し、または周辺資料からの推察を行なった。その上で、「桐壺」巻頭部」を範囲として、それぞれの訳文の特質を導き出した。その際、池田亀鑑『源氏物語大成』本文を基準として比較を行ったが、その比較項目は「文字数」「文の数」「漢字の使用数」「敬語の使用数」「文脈」「文体」「独自の用語・表現」「削除された用語・表現」「独自の解釈」とした。

第三章では、第二章で導き出した「桐壺」巻頭部」における特質からみる批判的評価を、二人の訳者ごとにまとめた。

第三部では、「与謝野晶子による『源氏物語』現代語訳」と題し、与謝野晶子の訳業を特に取り上げた。その理由として、与謝野晶子によりはじめての現代語訳が試みられたこと、また、それを契機にその後多種多様な人材によって陸続と現代語訳が試みられていること、さらに晶子の現代語訳が現在に至るまで多くの読者を獲得し続けていることをあげる。(306～340 頁)

第一章では、与謝野晶子によってなされた『新譯源氏物語』と『新新譯源氏物語』の概要を示し、特に『新譯源氏物語』の刊行意義の大きさを指摘した。

第二章では、その『新譯源氏物語』の出版動機および経緯を明らかにし、さらに神野藤昭夫氏の研

究により導き出された『新譯源氏物語』「下巻の二」の訳出文字数割合増加について考察した。神野藤氏は、訳出文字数増加の理由を「心の底で晶子を突き動かす何物か」によると言及していたが、その「何物か」とは、「宇治十帖」の「小説」としての構成のおもしろさ、さらに「東屋」巻以降の「技巧」や「内容」のすばらしさに対する晶子の高い評価と共感ゆえであったろうとの見解を示した。

第三章では、与謝野晶子が前人未到の口語体による現代語訳という偉業にどのようにして取り組んだのか、いわばその生成過程について、その文体に着目し、同時代作家たちの文体との比較を通して詳細に考察した。その結果、『新譯源氏物語』の文体は、晶子の強烈な個性に基づきつつも、当時の文学者たちの文体的潮流と、直訳型ではない新しい外国語文学翻訳者たちの文体との影響を大きく受けつつ、あるいは、それらを晶子が積極的に摂取することによって成立したのではないかという見通しを立てることができた。その関連で、森鷗外・上田敏との交流についても触れた。

第四部では、『源氏物語』現代語訳の限界と可能性—まとめに代えて—と題し、将来に向けた『源氏物語』現代語訳のあり方について考えた。(341～373 頁)

第一章では、既往の現代語訳にもそれぞれの長所とともに、それぞれの限界があることを指摘し、今後はさらにきめ細かく読者を限定(想定)しながらの現代語訳が必要なのではないかという方向性を提起した。

第二章では、第一章の問題提起に答えるかたちで、一一歳から一二歳という少年少女を読者対象として『源氏物語』「御法」巻の現代語訳を自ら試みた。一一歳から一二歳を選択した理由は、平成二九年三月三十一日に告示され、本年四月一日に施行された小学校学習指導要領「国語」【第五学年及び第六学年】(3)の古典について明記された事項にあるとおり、当該年齢層は古典について学び始めるにふさわしい年齢であり、また、与謝野晶子、円地文子、瀬戸内寂聴、古くは菅原孝標女もこの年齢で『源氏物語』の読者になった事実が認められているからでもある。

一一歳から一二歳という、はじめて古典にふれる当該年齢層には、ある程度の説明を予めおく必要があることから、凡例にかわる詳細な「まえがき」を記して、古典作品読書の導入とした。「御法」巻を選択したのは、千年前から変わらない人間の心の動きを捉えた『源氏物語』の魅力を生分に味わえる巻と考えたからである。死にゆく人と残された人との心の交流を描いているのが「御法」巻である。この現代語訳は、原文の情緒を味わえるよう解説などはあえて付さず、語りの文体を生かしてリズムカルに読み進められるようにした。よって、読み聞かせにも活用できるように工夫している。

なお、序では本論文の意義と構成を、跋では本研究の今後の課題について言及した。

論文審査の結果の要旨

〈研究概況〉

近代以降に現れる『源氏物語』の現代語訳については、これまで最も代表的な与謝野晶子および谷崎潤一郎の文学活動の一環として取り上げられることが多く、特に谷崎については近年〈旧訳〉と〈新訳〉との比較が詳細に行われるようになってきている。とはいうものの、『源氏物語』現代語訳はこの二人だけではなく、ほかにも少なからぬ国文学者および作家たちが挑戦し続けているのである。

『源氏物語』現代語訳が研究の対象たり得ることは、すでに『源氏物語』研究者の共通認識と

はなっているものの（河添房江編《講座源氏物語研究》第一二巻『源氏物語の現代語訳と翻訳』2008.6／おうふう、など）、信頼性の高い基礎的調査さえまだ行われていないのが現状である。そして、特定の訳者のみを対象とするのではなく、現代語訳全体を視野に収める総合的研究は皆無と言ってよい。

〈本論文の特色と意義〉

以上のような状況の中で、本論文の達成は『源氏物語』現代語訳の研究にとって、以下に挙げる特色と意義を有する。

一、『源氏物語』現代語訳の悉皆調査を行い、書誌情報を整備したこと。

これにより、今後の研究の基礎が確立された。

二、その調査が、現物を手に取って確認するという方針で一貫していること。

したがって、高い信頼性が確保されている。

三、『源氏物語』原文（『源氏物語大成』掲出本文）と各訳者の訳文とを比較することにより、各訳文の特質と限界について考察したこと。

その結果、同一作品の現代語訳でありながら、それぞれに相違があり、それはそれぞれの創意工夫の証し（特質）でもあることを明らかにした。

四、現代語訳の嚆矢としての、与謝野晶子『新譯源氏物語』の訳文の特質について考究したこと。

これにより、晶子の訳文の生成過程における、同時代文学者たち（男女）の文体と翻訳文体の影響・摂取の様相を確認することができた。

五、従来の現代語訳の限界を超える一つの方途として、申請者による独自の現代語訳を試みたこと。

研究を踏まえて、現代語訳の実践という斬新な試みをなし得た。

〈本論文の評価と課題〉

前項に挙げた五点が、そのまま本論文への肯定的評価と重なる。

特に、第一部については今後の同分野研究の基礎資料（必読文献）となることは間違いなく、国文学専門出版社である（株）新典社より〈新典社研究叢書〉331『源氏物語 現代語訳書誌集成』（2020.9／A5判 328頁／9,600円＋税／ISBN978-4-7879-4331-6）として書籍化された。

また、第二部において行われた〈完訳〉版「桐壺」巻頭部の訳文の比較検討作業も、「文字数」「文の数」「漢字の数」「敬語の使用」などの無機的要素を立項し、可能な限り主観を排した客観的かつ没我的な作業が行われていて、その計量文献学的手法が効果的である。

さらに、第三部では、最初の現代語訳『新譯源氏物語』が与謝野晶子の独自の能力・個性による訳出であるとの既往の認識を改め、男女を問わぬ同時代の文学的潮流と外国文学の翻訳文体との影響・摂取の結果も重視すべきであるとする見解は、独創的かつ新鮮でさえある。

第四部の、新たな現代語訳の試みは、研究成果を踏まえつつ新たな文化の創造に向けた挑戦として本研究科の使命に見事に適うものであり、今後の博士論文の指標としても高く評価できる。

とはいえ、なお今後の研究の一層の発展深化に向けて、以下の課題を指摘しておきたい。

① 第一部の書誌調査は、さらに完璧を期する必要がある。書籍としての刊行により、その

不備が今後指摘されることが予想される。一方では、新たな情報提供も期待できよう。

- ② 第二部における現代語訳の比較範囲を「桐壺」巻頭部に限定しているが、それは大まかな見取り図作成のためには有用であったとしても、より正確な結果を導き出すためにはその範囲のさらなる拡大が求められる。
- ③ 第三部における、比較の対象としての晶子と同時代の作家および翻訳作品の選択範囲がなお十分とは言い難い。さらに多くの同時代作品（文章）を調査対象として加えたい。
- ④ 現代語訳の評価にあたっては、近現代文学及び出版史に関する知見をさらに深めたい。
- ⑤ 現代語訳のみならず、『源氏物語』そのものの「読み」の深化への姿勢を維持したい。

〈博士論文としての適格性〉

本論文は、新たな文化創造のための契機となり得る斬新な研究課題が設定され、結論は新たな文化創造のための有効な提言となり得ていると判断する。研究過程においては、特に各種資料の博搜及び価値判断に優れ、その処理も的確であり実証性が十分に担保されている。また、論理的考察力も十分に窺われ、さらに意欲的な創造への挑戦（自身による現代語訳）も高く評価される。『源氏物語』の研究史を踏まえつつ新たな研究課題を開拓し、当該課題にふさわしい研究方法を駆使して、大きな成果をあげ得たことは間違いない。

申請者が在籍した博士前期課程 2 年間および後期課程 3 年間の学修研究の成果が結実した本論文の達成は、『源氏物語』の今後の研究に裨益するところがきわめて大きいと言わざるを得ない。

以上、申請者佐藤由佳の学位請求に関する学位審査委員会は、申請者が自立した研究者に求められる諸要素について十分な能力を有しているものと判断し、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。